
東日本大震災記 ～茨城に住むある男性編～

小林 太陽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東日本大震災記 〱茨城に住むある男性編〱

【Nコード】

N6689R

【作者名】

小林 太陽

【あらすじ】

東日本大震災を茨城のとある港町で経験した者の手記。（実話）

地震だ！

2011年、3月11日金曜日にそれは起きた。

昼、私は仕事がつたまたま休みであつたため自室で本を読んでいたら大きな揺れを感じたのだつた。

地震の経験は多かつたので、この度来た地震がそれなりに大きなものだということを本能的に直観していたが、まさか大地震になるとはその瞬間は思いもしなかつたのである。

揺れを覚えてから数十秒しても一向に揺れは収まらず、ますます大きくなつてきたので不安を初めて覚えて、一気に階段を駆け下りた後、一階に居た母に向かつて私は叫んだ。

「おい！！何やってんだよっ！さっさと外に出ろっ！！」

母は療養中であつたためよろよろとリビングから出てくると、私は彼女の肩を握つて、怪我をするんじゃないかという位の力で無理やり玄関の外に引っ張り出した。

素足のまま今にも崩れるのではないかという雰囲気の自宅から出た路上に來ると、立つていた道路が何度も波を打つた。

そして、次の瞬間まるで物の怪が口をガバツと開くかの様に、目の前で大きな地割れが起き、隣家の塀を傾かせ亀裂を走らせた。

「……っ！地割れ！！地割れだよ！！」

私はそれを指しながら、路上に出てきた繋ぎ姿のある男性と母親に向かつてそう叫んだ。母がおろおろとしながら大変驚いていて、その男性も啞然としていた。

恐怖というものを滅多に覚えない様に普段は努めている冷静な私だが、ここでもようやく私は恐怖を自覺して、頭の中は“これは大震災だ”という名目の混乱で一杯になった。

これから分かるに、揺れは何と2〜3分ほど継続して続いたのである。

ここで瞬時に危機感を覚えたことは、近隣の化学工場が爆発するに

違いない、港が近いので津波が来るに違いない、そして何より余震が必ず来るので建物が崩れる可能性があるということ。

間を置くことなく、近所の人たちが家から顔を出し始めた、皆さん青い顔をして出られて来られ、私は次の様に言った。

「余震が必ず来ます。家の中に居るのは危険です。（津波、工場の爆発を考慮して）この土地に居ない方がいいと思います。」

住民と心情を分かち合っている暇などなく、まずは人命を守ることが優先すべきであると思っていた。

私はその様に言い残して、避難用の荷物を3分ほどでまとめて、母を連れて土地の高い隣街を目指し車を走らせる。

母は混乱していた。私の横でただ混乱していた。勿論私も混乱していたのだった。

車で走っていても十二分に分かるほどの余震を何度も味わう。交通が麻痺しそうな雰囲気であった。

スーパーの看板は今にも倒れそうだった。信号もストップし、電柱も倒れかかっている、電線が切れて垂れ下がっていた。

あるガソリンスタンドの前まで来ると、かなり大きな地震が再び起きた。車が浮くのではないかという程の揺れの後、となりのドラッグストアのショーウィンドー全体が不気味な太陽光の反射を見せる。当時に一気にたわみ、店の外に出て来ていた店員や客の多くの女性たちが叫んだ。

私の脇にあったガソリンスタンドの看板が落ちてくるのではないかと不安を覚えて、皆車を走らせずにストップしている中、今思えば危険な行為だったが、前の車を追い抜き、とにかく逃げようと走らせた。

国道は人災による事故などが起き、混乱が予想されたので、裏道を辿って隣街を目指す。

家の瓦が落ちていて、タイヤがパンクするのではないかと心配しながら車を慎重に懸命に走らせた。

脇では田園が液化化現象にて沼の様になっていて、工場の方から大

量の黒煙が上がっており、空は霞み始めている。

自宅には戻れない

40分くらいして、目的の場所までやってきた。ここは周辺の土地よりも高い所にある鹿島神宮である。鹿島神宮の鳥居が倒れていた。毎年、一年に何度か参拝する、あの鹿島神宮の大きな石の鳥居が倒れているのである。私はそれを見て、日本の神様がきつと怒っているに違いないと思った。

母と駐車場で不安を分かち合い、ただただ車内で避難していた。地震の影響か、隣の古い神木の幹が、幾つか駐車場のアスファルトの上に転がっていた。

目の前の老舗の旅館が余震のたびに揺れているのが見えて、母はそれが崩れるのではないかととても心配していた。

小一時間ほど経ってから、駐車場にある売店に私は顔を出した。そこには店主の老人が居た。

「（販売用に陳列棚に並べてある）達磨達はみんな落ちなかったのよ。」

「ははは。本当ですね。落ちてない！」

店主は嬉しそうだった。まるで自分の子供たちが助かったかのように私には聞こえた。

「あの、もしよろしければ、電池を売って下さらないでしょうか？ 単三の電池を。」

店主は躊躇うことなくおよそ14本のアルカリ電池を2000円で売ってくれた。値段は高い様な気がしたが、何せ緊急事態である。

「もう店を閉めようかと思っているの。」

薄手の暖色のカーディガンを着た店主がそう言っていた。テレビでは、市原の石油工場が炎上している様子が流れていた。この時は、まだ岩手の映像はあまり流れていなかった様である。

「そうでしたか。もう店を閉められるんですね。…どうもありがとうございました。」

私は母の待つ車へ足をゆつくりと運ばせた。態度は極めて冷静だったが、内心は工場に勤める父やその友人達が大変心配であった。車に入ってから、先程売店脇で購入した飲み物を母に手渡した。そして、携帯で災害伝言掲示板に無事であることを綴った。

私の車の隣には、鹿島神宮へ観光で来られたと思われる夫妻が青い車に乗っていた。それはコバルトを連想させる様な、美しい青だった。

青い空の向こうには、まだ黒煙があがっていて、私はやはり父などが心配で仕方が無かった。

電話を何度も掛けてみるが、回線が混雑して一向につながらない。母と私は不安が募る一方だった。

更に時間を置いてから、再び自宅へ戻らないかと母が提案した。私はこの惨事を想うとそれは止した方が良さと思っていたが、母はどうしても戻りたいというので、再び国道へ戻った。

すると国道はパニックだった。とてつもない渋滞で、一向に進むことはなかった。後で聞いた話だが、津波による増水にて国道は途中で分断されていたという話である。

仕方ないので、私はまた引き返したのだが、母はやっぱ家に戻りたかった様だった。

私はその後、コンビニに食事の手配と現金を下ろすために寄った。地元の高校生たちが沢山列を為して、混乱していたようだったが、お祭り気分の様だった。

私は幾らかの現金を降ろして、焼うどんと飲み物を購入し車に戻った。

その後、避難所となるべく学校を探しに周った。そこは高校の避難所だったが、高校生達ばかりが避難していたため、別の場所が無いが役員に聞いた。

すると、FMである中学校が避難場所になっているということだったので、そこに向かうことにした。母はこの時、幾分か憔悴していた様だった。

避難所での私

ある中学校に避難のために立ちよった。武道館には数十人の家族が非難されていた。

柔道場の特有のビニル製の畳の上には、毛布が幾つか持ち寄られ、子供連れの母親グループや、老人夫妻などがみな不安気に肩を寄せ合っていた。

避難用に用意していたシュラフを広げ、余震の続くこの空間に共鳴しながら、母とその一角に腰を下ろした。

しばらくして、私は車中に残してきた忘れ物を取りにゆくために立ちあがり、武道館の玄関へ向かった。すると、そこに市役所関係者？が幾つかの飲用水の段ボールを持って来られた。

「段ボール、お持ちしますね。」

「ああ、はい。…まだあるんです。」

段ボールは4つほど用意されていたようだった。私はその飲用水の段ボールを持って再び、普段は道場の掛け声に共鳴する空間に飲用水を運んだ。

「みなさん、何名ほどいらっしゃいますかね？調査で調べなくてはならないのです。」

私は言われたとおり、その場で避難されている方々の人数を数えた。「50名弱ですね。」

「わかりました。では、これを皆さんで分けてください。食料はまだこれだけしかありませんが…。」

ある一つの段ボールには、カステラやクッキーが入っていた。これをおよそ50人で分けるとなると、一人あたり二口程度しかないことになる。しかし、その甘菓子は不安に満ちた避難所の方々にとつてはとても有り難いものであった。

「どうも、ありがとうございます。」

食料を持って来られた男性二人が帰られると、私は皆さんに食料を

配布する旨を大声で伝えた。

その後私は一角に戻り、シュラフに包まって携帯でネット接続をしていた。母はとなりの老夫婦と自分の不安を何度も何度も癒そうとして、何かたわいのないことを話していたようだった。

夜中にトイレに立つと、また例の男性二人が毛布などの支給に丁度やってこられた所だった。私はまた毛布を抱え、配給に精を尽くした。その頃、武道館の中の人数はおよそ倍に膨れ上がっていた。

トイレに行く途中に、年配の女性に話しかけられた。

「ここは大丈夫かしら？」

その女性はここの避難所は安全なのかという意味で私に尋ねてこられた様だった。

「ええ、耐震補強してあるそうですから、大丈夫だそうですよ。」

「私、家に居ただけで、やっぱり怖くてこちらへ来たんですよ。みなさん避難されているんですね。」

その後、私は彼女と別れてトイレに向かって、用を足した後再び武道館に戻った。

明け方、私と母は自宅に戻ることにした。となりの老夫婦にあいさつを済ませ、武道館を出ようとすると、これまた偶然、物資支給の男性二人がやって来られた。私が席を立つたびに物資の支給に来れるのである。彼は私にこのようなことを言った。

「これ足りないかもしれませんが、どうぞ皆さんで分けて召しあがってください。」

α米という、水を注ぐだけですぐに食べられるご飯のとウーロン茶の配布だった。私は再び、道場内の方々に声をあげて配布の旨を伝え、武道館を後にした。

そして、自宅に着くまでに車を走らせていた道中に見た光景は昨日見ていた街とは異なっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6689r/>

東日本大震災記 ～茨城に住むある男性編～

2011年10月3日18時59分発行